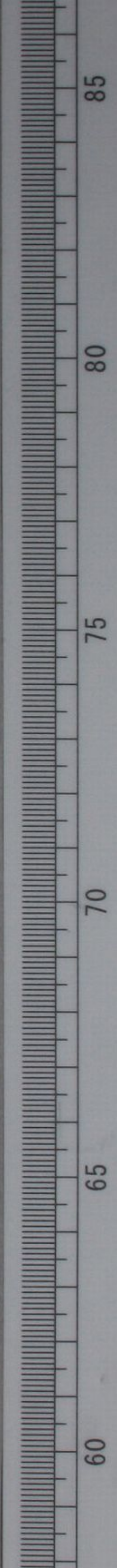




中村俊定文庫
文庫 18
225





三十六貝歌仙合評
江戸諸國發句歌仙

誹諧

吾孀之都登 二冊



書林

文淵堂
樂成堂

合刻

序

萬里溪鶴雛子母功を
我門へしめけらたるを
左へまじの志多ゆの
月子煉日へ強じ
かみ時るる同志の友
孫の影心十八の貝
背安の勢の轉為
判初知るけ 匱子

賈有結と書假の、
江蘇の
多し、
集あは
東の、
島乃、
つと

序二

此集や、
か、
無、
祝



自叙

歌の伝貝から一軸の
 もとを巻目を振る句力
 を争母結ま行辨案の
 判まも中たしくと結を
 律々重々水句を
 鏗鐸の聲をよほすの
 浦あそ子於貝之左右

強弱は服を脱ぎ
るもの争はるあや
まを様おま
しをとおま
自と書て古人の遺稿の
手稿の集の故
お、星霜の
余江東へ赴
ぬ

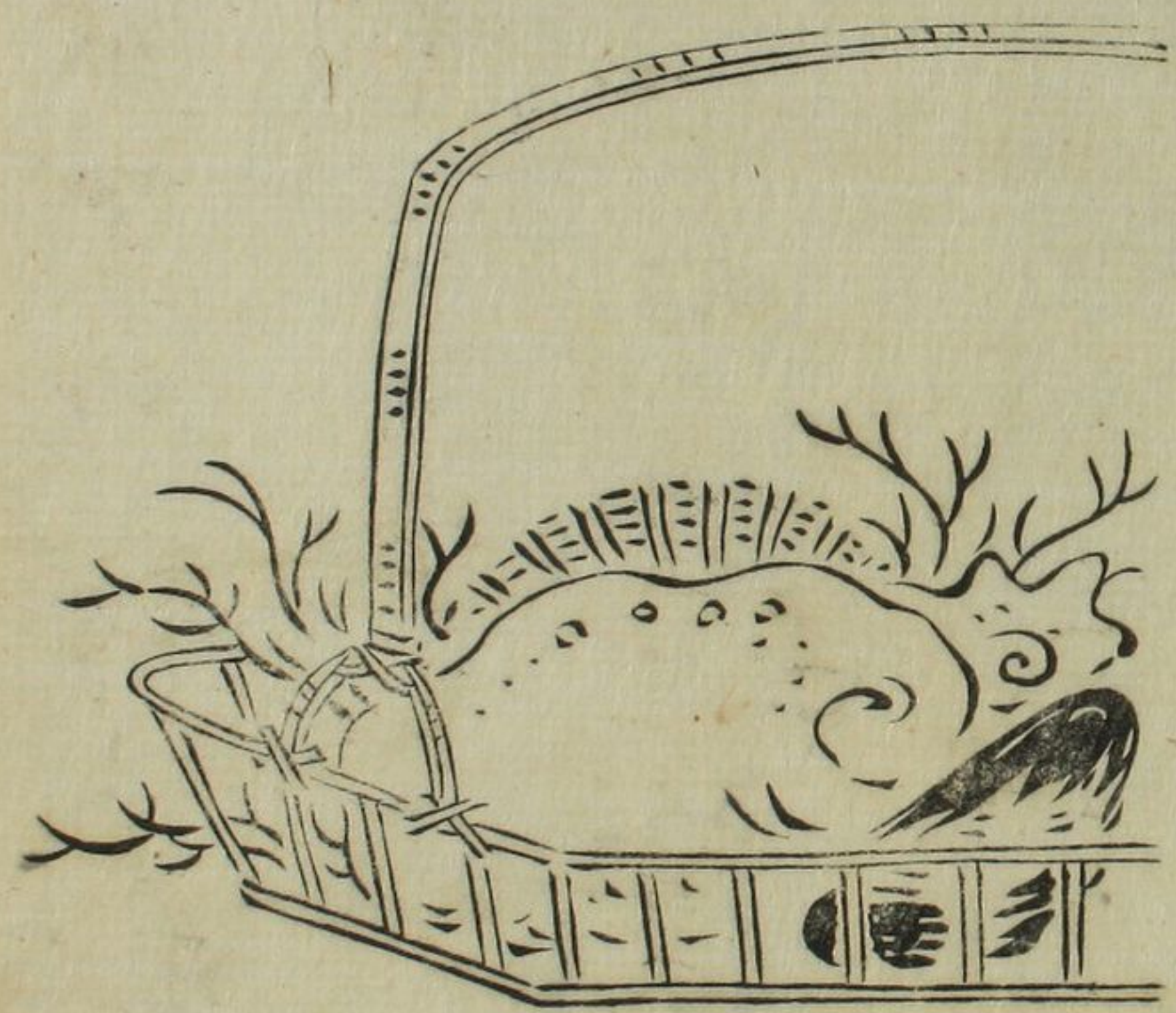
序
海軍下法
中め程也
母持出
宗匠
一集
古郷へ

中
昼の錦と
か
何
施

享保
二
那

羽
陰
秋
府
後
誹
萬
里
溪

鶴
錢
述



初
一



歌仙貝

一番 尤すれ貝
右にすれ貝

涼—さや簾をもして裸貝 鶴錢

爰うらな 忘れすもむ雛の波 紅塵

尤おむひしけはも君をりし

とよみし付風情—は

ありちり松—ひの子代

うけさふり雛乃数く

あさころ子ぬ宴あり持し



狩野秀水筆



二番 左毒のむ貝
右花のむ

貝爪やむの兄君の叱送り 非琴

花貝の夕子跡の胡蝶や 紫月

花のあまのこの肩あはれ
いとく自しあり 右胡蝶の羞
の相々然るる莊周の心もあれ
と花をうちとれ

三番 左まてしこ貝
右ほるる貝

撫子や蝦夷もまの貝撰 拵野

妖ものいつ力を投て蟹貝 流水

妖もの腐州をあらる志れもの
やおともろこいあもあめあろ
すうらるせし 牙平拵あつす
こーかあさつとるる

四番 左むらさき貝
右磯うい

飯はや紫貝の洗ひてへ 霜禽

破りのしおき 這小葉の大はる 翠樹

右の破りい葉の方の口を
くくくくく 扇形の口を
紫いしれも劣り綴りぬま

五番 左あくく具
右あるかい具

西りく眉のまきあり 櫻具 文洲
糸寒やあのもあるのかい具 千奴

眉まきあるはくくく
あつあつこのまきあるのく
表まきあるの西りの
縁まきあるのく

六番 左玉具
右袖具

玉いやくけまきく 星絛 東羽
袖具をこのむよる 下夷鎌 新中
多いす講の袖具綴りく

只ゆたのきくすや梅の
匂いもそひてむらむく
人すれやきふる

七番 左うす貝
右いらうい

きくすに貝いまきくす
いゆかい男おびんう様貝一契

貝いにきくす焼のうすれみし
うきもきくすおひ男おびん

アそつとをきくすむと戀
の一般

八番 左ほらうい
右都貝

や貝の伊まき梅を掻くおひ
あーや貝の都へ駒あへへ 紫川

今やあくらん望月のと詠
一 九峰を起あはとま

もあはれハ何れの一すち好山
のけし大ををりか
也

九番 左 右 貝

うつ浦 ぬきし貝の波 詠千
時 ぬき藻屋のぬき小見物 不 孤

左 難 一 云 藻屋のぬき
はまお ぬきと 右 陳 一
云 小見物のとつものせり

ぬきぬきしおまし
まよりのおとましとかく
ハ ぬきぬき

十番 左 煙 貝
右 雀 貝

煙 志 一 樂 一 ぬきと 志 ぬき 立 雪
跡 追 小 花 ぬき 袖 の 雀 貝 文 里

左 少林 孔 笛
右 高 雀 化 蛤

よつゝと採とれ

十一番 左梅屋貝
右井りい

昔月て採る梅の香も近梅屋貝 柳紅
子系(り)井貝も近(こ)おふあを(り)丁谷

右の方水(り)つゝ崩(り)よる(り)み
便(り)あや(り)し(り)管(り)あ(り)く(り)海(り)寺(り)
すお(り)あ(り)せ(り)世(り)の中(り)を(り)く(り)ても

採(り)よ(り)る(り)増(り)え(り)し(り)

十二番 左あ(り)る(り)貝
右(り)い(り)し(り)貝

腸(り)つ(り)く(り)蚊(り)屋(り)て(り)る(り)月(り)の(り)鮑(り)か(り) 蛟(り)雲(り)
唐(り)の(り)露(り)ひ(り)じ(り)貝(り)採(り)ひ(り) 如(り)昔(り)

照(り)月(り)の(り)何(り)い(り)あ(り)さ(り)わ(り)る(り)も
あ(り)れ(り)と(り)は(り)る(り)る(り)の(り)い(り)し(り)の
字(り)は(り)る(り)る(り)あ(り)る(り)右(り)を(り)り(り)

少処

十五番 左志くし貝
右志くし貝

志くして孫を志すや古様 友紫
あは貝の男を似しり 杜あ 竹栗

孫を志しを翁八十の強
健あり男の似る尾徳の
細く志後の付りつれ

志くし

十六番 左志くし貝
右志くし貝

戒志くし志くしをゆるせ文は干 葉可
金志くし志くし貝流の月 友桂

産らぬの名はの芋好のひり
志くし志くし志くし志くし
つる戒行するれぬふり

十七番 尤もおろり貝
右志つと貝

蛤の三符喰あつれ百子香 阜
砂もこの仇もあるた 蜆川 孤 鴻

三つ符と詞をうけるあ声
も砂もこの仇も塵もま
尤をゆへくさつり

十八番 尤千粒うれ
太小りい

那もあつれ蚌もあつれちんちんい 沾
延子た小貝あつれり日向ほこ 夫 草

あまつれあつれ蚌をいあれが
すもあ代のあつれあつれあ
小ういあつれりりるん宿も
あつれあつれ日あつれりり 晒 軒
あつれあつれあつれりる 柱 甫 方
あつれあつれあつれりる 延 子 子 也
はるまよるや

六十八番之俳諧標榜

行軒桑五千叟判談



太平山採花序

太平山丁治城之丑寅也猶如

雉之有叢焉其所壇碗旁礪

沃田茂村民衣食於茲而名

與時多遭遇誰不仰止若夫

四時朝莫之景風花雪月之觀

士人由而不知其知而言之者

山靈其有寵哉

享保乙巳年仲春愚益翁識

龍剪子牛の刀や大平 其栗

多海子ま向のむや大平 紫紅

深山木を後の澄へ大平 紫弄

柳東の嶽の走乃推古迄 如舟

江の蓋へ大平山の籠所 東羽

足跡の吳へるんむの嶽 蛟雲

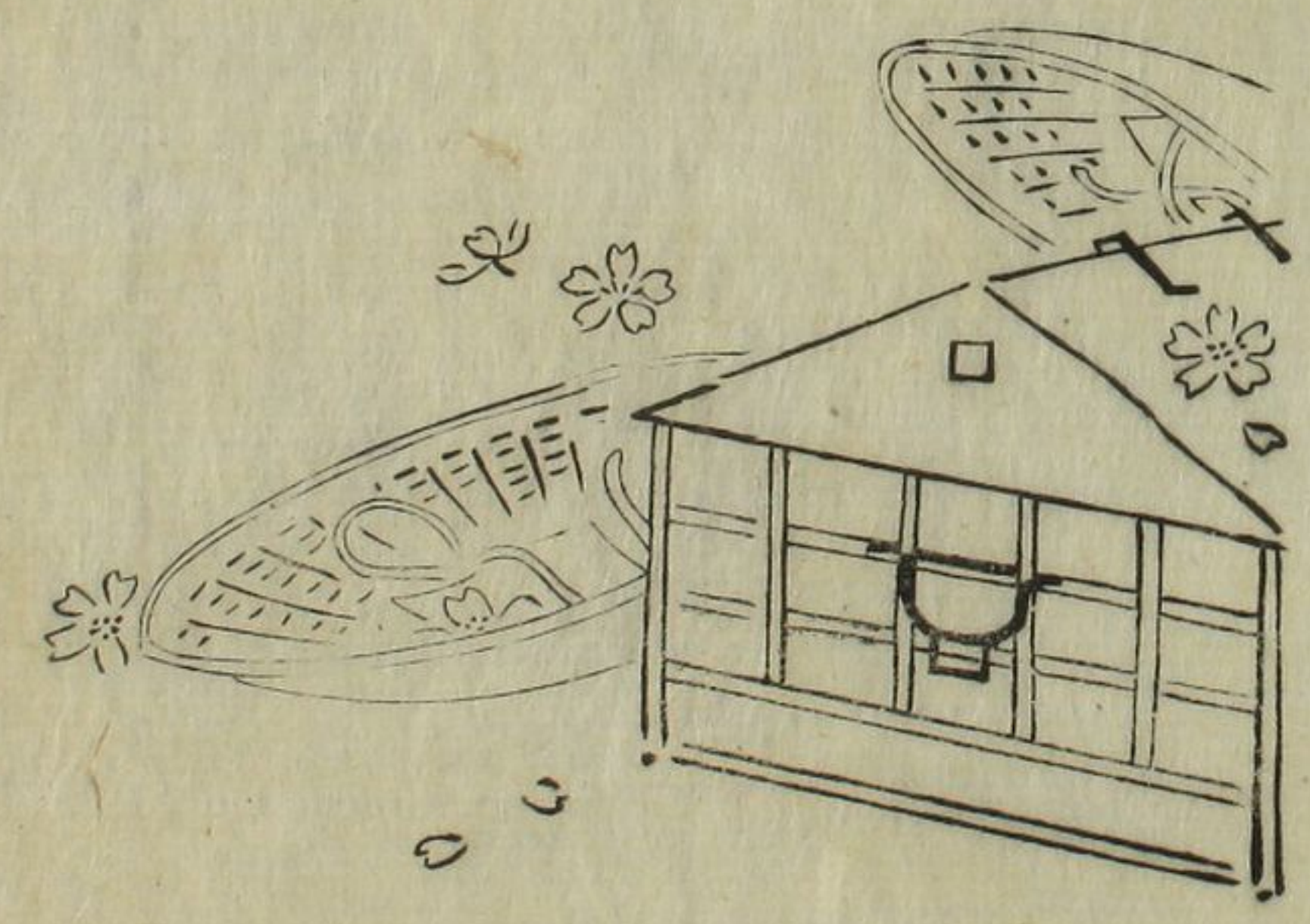
蒸籠の蓋をひるすまの嶽 臯雀

太平の片肌白しむの裾 赤樹

むの兄はく光や大平 文里

入船の的まむの太平 詩集
 菊畑下大平山を名所一軒 丁谷
 大平山白下帆柁梅下地 石塵
 む光咲下大平山の抱ひき 弄海
 むを吐おの根信(大平 友成
 初実下雪の簾の巻拜 北琴
 多いろの法螺も形おす様か 夫甚
 熊の裂枝や為おの大原 踏錢

洞旭筆



春の部

一集の計を詔且みとし
つたらく先なる中し詠吟
七章一をばしむ

多餅下底をま弓の引心 若狭
一拜を天おつ酔正おの春 丈草
流あゆも三の屠獲実橘 非聖
潜龍の夜のひをこけの妻 阜落
鷲のぬほんるち市代の虫 嘉樹
劉の座ん代この実揚る家花 蛟雲

多毛ゆし新冠ゆの毒 赤坂
三光いよの梢あり百ある 梅坡
胡葱の楯を生ぬく且た 糸弄
を喰ふ寺院い妻の寒た 赤羽
海水の魚初午ぬ 詣 露後
虎の威を借着初午人の成 阜落
もつ午や吟すれと傳沙の音 如昔
白丁ハつたる利るけ葉た 湖雲
その樂する熊も岩戸あり 細州

脇指ハ骨中ハ藤七なつとら 蛟雲
 向村のりり灯りしりり 松伴
 厚もの、掛もぬえたけ 馬耳
 君代ハ鳴戸子立ん市幣 寸松
 青海苔の子をあよ入日 高申
 赤ののつむりあま 赤申
 肩抱此欠を補小燕た 寸木
 蕨の餌を謎こ 知守
 香ふこの刺の香あ 知角

糸赤ハ起あ 松小兒あ 非琴
 滅毛ハ嗅ぬあ 白あ 鼻樹
 ちあ 打あ 湯あ 籠あ 梅あ 萩可
 了あ けあ のあ 子あ 仁あ のあ 端あ ありあ 梅あ のあ 刺あ 一河
 何あ つあ 十あ 子あ をあ 入あ 子あ 藪あ のあ 毒あ 氣あ 海産
 紅紙燭あ 暗あ 軽あ しあ 梅あ のあ もあ 飛あ 四角
 葛城あ のあ 神あ 子あ 習あ 小あ 糸あ 圍あ のあ 梅あ 湖舟
 草あ 下あ 芥あ 生あ もあ 同あ 黒あ 脚あ 半あ 丈あ 菖
 草あ のあ 下あ 存あ けあ ぬあ 舌あ 連あ 下あ 草あ 也

雪下く人垢つらぬ山住居 原山
 鶯下く引こま帶子舎 塩 龜田 弄を
 淵内のお入柳 門羅暖屋 赤樹
 集のはり昇 尚 榊 志あり
 賣平を乃手物まきく柳 志撰
 舟ののびを目えに柳系 子奴
 糸の川や翠蔭の四に柳系 取山
 少の川の陸を信行 柳 一契
 丑の時女ハルミに柳系 鯉川

糸を曲く題を移し柳 花吟
 半天の泡のそえしつやを 崩尺
 舟の曙若し 榊 文里
 手習の思入志をへ河 関雞
 春柳の復りあるまを 橋菖
 ながひの倒を羨る榊 志千
 春柳を百毒の外に 校を

院 内関山異樹怪松
 多木中みせし木とく
 一爪七粒の梢あり

芽さうひまいつし将門七色天童不
 起の麓乃力下雉の色天童霜雀
 舟を呼びし研文江
 山ありし誰植音のそ守後凋
 焦してや項羽の怒雉子の色秋英
 言ふその足代とさる不芽南車
 文洲

莫辭盞酒
 十分醉

今春むらぬ日傳司の機た
 張子の鷹を活す古約
 海原下棟上崩れけり
 袴子居の立抱ひせり
 余子あを石も浴せ月涼
 女小尻く土毫拵起す畦

鶴錢
 夫昔
 非琴
 弄波
 東羽
 志千

富士の山は日本は 咬き
履音の竹 斯くも 北極の
衣をうや 貞女は 結小腕の 裾 赤梅
くすくす 白蛇は ばお水湯子 鼻を
薩の尾を 従ふ公家の 梅つよ 新千
眼は 目子 役の 目も 赤梅の
低く 足門も いろに 赤梅
上より 赤梅の 庭を 赤梅の 赤梅
多つと 仕る 勤の 赤梅の 赤梅
雪下 下 埃を 醸す 夕 赤梅
赤梅

こと 柳も 五十 下 寺 赤梅の 鼻を
金くく 赤梅の 蜂を 赤梅の 赤梅
唇の 子 赤梅の 風の 赤梅の 赤梅
赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅
いの 赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅
居眠る 赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅
竹 簾の 赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅
水、赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅
赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅
赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅
赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅の 赤梅

筆概え木も入るゝ敷のけ 東
 大子も睡くゝなるの借用 蛟
 半輪のもしんも欲し 詠千
 翠もとり乱し 燈のそり 弄
 啼麻の法も一頁のふ 如
 蕩すもとり 影小つゝい 赤
 灯すの戯るゝ 蠟志を 志
 土圭を寝せゝゝ 又す奔走 菊
 子と世代も 味茶共らゝ 文
 子と世代も 味茶共らゝ 泉

全竜寺之櫻

出づらても竜を潜むや大櫻 丈
 鐘撞く様吹く下大昂 落
 けくゝんの征もか娘ゝ 其
 狼子平やあひせむ山様 霜
 無地の帆もなる排様 入日 拍
 腐れしる庭を接袖の様 皮
 筏士ハ子のあのををあらゝ 沾
 竹林の留守も成る様 蘭

夕迹の曇るやうい山様 節紅
滝川子星を佛せる様は 竹趣
灸嫌ひ菜子さびや山様 桂実
つるをさるる日々の媒江戸様 文正
厚房子砂をはまはるるさめが 末樹

松峯之不動の奉納

鞘の俵が縁起するに在るの月 夫草
焼の山を削るに春の水 月
の船下新力又ぼの底 琴蔭

まるほと舞うしいのほり 色紙
陽太や入虎の門の曲を鞠 梅窓
鯉の串迹へ糸溪の流を 八香
妻雨子濡へ尻啄む野を 可孫
春をうた民の毫の指すか 泉趣
くを繋ぐ妻の栗の刺の程 朴志
砂山の肉もあぐり春の雨 沾太
さるるし音や河の魚あひ 海齋
はるる虎や秤目を秤す竹の俵 紫月

在るにやまの乳房北一樹陰
集ても一くれしすちの句
紅塵 几露

塚系山晋子碑前子
醉倒

をろれちま枕やむの呪倒れ
えいけいに流せ復近よ音
おすし男く霞段の小ぬ湯を好
鞠の作足下魚を採る
召るれも虎も鞭を月の宴
和談もぬく萩もさく
友紫 露後 岫旭 東笋 竹旦 山

秋のこも蛾とほる神の形
文も武もあく肥る人眉
ゆきの日雪掃女房くく
琥珀も塵を撰法中の町
巾着の穴を叩いていて山
丘の市光をひく木の下
火の藁を合はるるさるあ
片帆も笑を採の投介
娘もそり力鼎あけ
抱ふもそくはあるま
机州 紫後 旭笋 且山 岫旭 後

かきしりやうから雨も機陰
をく馥しよ井子の州むら
唇と壑著元くくもはあし
不き門より瘦く西戸
杖より藜一本なるけく
吾物指れを陽報を知る
在孫の世を憚りくひく
くくく神をのるる様去
古郷より翦矢打く遠路氣
席より廣聖の借産あが

且後笋州山紫旭且州笋

餐應のまぐくくはく志このをい
月堀當る井戸の羨テ編
松垂まき入試てく目見や身
穴入るや木鶴居るあし
竹のあまのれを何とぞ
まや麻屋のくくあしを
向上の付け待て様子
冊抄の枝子礼付く息
秀介い下木杖もまを盤
それいす五加枸杞のま垣

毫旭山州紫且笋山後紫

花の香をひらきけるの香 翠梅

花中の鼻とりのりき

ちりばめしものり付あかた 其栗

鼻の穴て文讀んばあかた 落後

曙の價いあかたものせ 鼻霍

漸割しあかたものせ出入 友州

山にたあかた初夜のやうた 且陽

かかたあかたあかたあかた 流水

餅州子あかたあかたあかた 硯色

七

赤い酔あかたの中此斬か 柳叟

白柳下あかたあかたあかた 非琴

去至あかたあかたあかた 名舟

白赤い瘡のあかたあかたあかた 文車

飯橋のあかたあかたあかた 赤樹

牛の尾を味あかたあかたあかた 文草

雞一對

お檀子けあかたあかたあかた 鶯後

ハ橋底あかたあかたあかた 文草

婿の位よめ

以てた好田の(足)指拾は可隙

初くは片ををるく

尋はや梨の隣は桃の門 其栗

東武(おむ)むくみおま

の野亭(おむ)むくみ

夕を(おむ)むくみおま

落後

そのゆき(おむ)むくみ

賀茂長(おむ)むくみ

友のす(おむ)むくみ

く(おむ)むくみ

すあぢ(おむ)むくみ

い(おむ)むくみ

出女の(おむ)むくみ 落後

二の股(おむ)むくみ

以奥(おむ)むくみ 樵(おむ)むくみ

江都

到素の佳句(おむ)むくみ
高下(おむ)むくみ
季の前(おむ)むくみ

一かみの 風流とま

誰よの雪にあらはす梅花 沾山
 梅の香に隣つゝの物に 桂室
 字を忘るゝ女子孫も床に梅を 敬雨
 子越連る梅のむしの身は 曉雨
 毒の梅は木屑のぬけぬ畠中 自慙
 田境の垣下ろふをれ一草梅 寸牛
 そとに斯く怖くま谷のり 為邦
 くらひすむけり記 雪の竹 翠羽

浪のもとも 赤梅の宿 沾院
 菊子からてる梅の枝 祇法
 鍋墨等ついで流る椿は 訥子
 鯉もさし 後念山の土乃穿 湖十
 いろくろの鯉を深出す日 魚子
 てんくろの舟を流して水の上 平砂
 城の地盤の志あるぬる鏡 玉芥
 灯火を追ひ圍の小鯉は 空翠
 庚申の隊もくみ壺堇 素丸

董野下賊氣やあつるふゆ
 女童の岨くさや松葉を
 塗立つ時ころは赤のむ
 何鳥の舎を借すや花の志
 懺さる雨の苦もま雞茶
 世の中は待せくくあつる
 おぼるげや松原徳の山様
 夜くや顔こま洗ふ山櫻
 雞くくくくくくくくくく

來風 占雅 喜阿 樗山 占李 占凡 常仙 百洲 御風

泉は二重あつるをわすれ
 いちよれやもの宛けお吉普請
 下こそせけて嬉しもの陰
 門口くお織まてけむん
 名前の静まつふ柙を
 吉柙や樹くはのとあつる
 蛸と流例崎のくはちる向
 ちよあまや泥もあつる大根
 去雨を笑やうお後の三希あつる

少長 局菴 珪琳 訥子 占山 巴船 米仲 青嶽 魚貫



蛟西之畫



舟を回らば居る舟も福も寐
 去るも男の習ふ其の琴
 棚ういふ後待の心り有
 いのちもすはらふも夜も
 みの花ちもめけり恨ある
 子れおしるもちもるも自む
 曙や鐘も蛙を乱けり
 玉斧
 祇湯
 樗山
 序山
 超波
 梅宇
 汰子

夏之部

梅るこら生かたきる裕る南 ぎん葉
梅はのびゆく涼貸座敷 翠樹
くま入園くほまきまぬふ 東取
竹の子は文字もろこね 壁の障 阜宿
笋や一かき覚る琵琶法師 紋衣
菊竹の葉の海子の垢離衣 杉 千
まろ弁也名威を振る巻衣 北湖

けいけい海の音の橋柱 涼山
さ戸刺の法衣を舞ま毛虫衣 弄伎
是も亦戸のさる蜘蛛の喜地衣 碎我
朽厄う妻をからに新樹は 非琴

其栗高士偷用の

山莊州木乃

茂かろ

筆のまをぬむのり

青瓦浦日之酔ふるを醒すん 菅河
帷子買也 不よりこめ 其来
奥くとも世以ハスニ才 駒 文昔
あふ大睡乃ハ流る後川 杖架
曇る雲の月此米長を待たて 雨亭
新米孫の精兵と見入 死二

何の飲奥

表はあり
死を仕廻し
お酒のぬれ

雲詩

上倉々

中入の云し尾は刺り山 梅坡
禁酒林くおつくる蚊屋 露淺
五六里の驛する何れも 文昔
折つく玉をまきまむ彩尾 泉遊
昼飯く群く居眠る相の月 松伴
吹ぬくてつ麻袋と見 弄波

比丘尼名もろこりくの切程
 言々いふ巻也下々帯の尻
 約束の縄がまゝに纏得る
 重んずる心は藏も程現
 安鞠の並ふや林木大分尻
 三とせよ一度優柔金袖
 面白く思ふも瓦の唐津盆
 ハやしをさうと握る鞠籠
 月汗く至上の後主老道
 百足をいづく赤銅

鼻露
 城 橋 付 施 草 弄 鼻 城 地

下カ

何とていふ所也の立派女
 女々しい仕立髪丸黒海苔
 名 森くち稲荷の並宮平あは
 主策をいづく買つた一カ
 耳雨の似あふは耳敏川
 下駄うに娘肩もかりり
 西の宿もつても公榜示杭
 片づく浮祭半日千百
 金堀の宿世いふは土 籠
 宇治より祢子を踏ふ末三麻

鼻 後 草 弄 伴 城 施 草 弄 鼻

言すれを純子のひりぬ白の
 院をるやして安んじ井の月
 阿の面(せめて)了る菩薩面
 伊達を振らぬと土主悟水
 ナリ 顯して雪つまのりけぬ香
 ありまよりつるあいのゆれ
 十文字造り備くまの物坊
 皆出較つといふ世解といふ
 当字の言をよあむむの下陣幕
 今もつるつ、無つるは他

淺地伴弄皋菖坡伴殊毫

けりらつてひあひつる八橋
 とむのらあひし約自約
 むらむらむらむら志あり
 今といふより言るなり
 欠のふぬく言るなり
 とう自むあひより

柳の福襟はしのたて杜若 露後
 雨々々々七日病をを杜若 梅坡
 消張の流北矢つじり子向す 流旭
 茅安の茂畝何反杜若 古樹
 脇嗅の力を免あす牡丹 感弄

仰真の目を牆て突はつんた 病後
新 机牘
を平小のるるの月のお母の 潤而

予不務ありて隙内山より
けり来すまゝの多き山内
れ 噴 噴中の閑居閑中の

予止つてあゝ谷川やうんこま 井野
天茄草のいともなる 柳に舞舞莫友紫
冥楼の鳥の 枕の多れ肩の
獅子の氣乃多に 毛袖の内あり 舟

敦盛の兜をぬれも毛袖を 校を
をむも杖をぬれも 其下
おとめも 齒めりも 鹿塘
昼の 筑師の 紫弄
儒者の子に 風を不はたし ちる
乳を 體を 夫昔
丸の 癖を 此琴
捨子も 相者の息に 赤樹
番はりの 不孤

箕士のこころを記すか時々の
 詩栗
 柴刈の道ゆく海邊時鳥
 文里
 平し能く言わば深き習魂
 文例
 おるや居のよみ乃奥の杜宇 来 駒耳
 曉 居のよみ乃奥の杜宇
 居のよみ乃奥の杜宇 来 駒耳
 系も 居のよみ乃奥の杜宇 鼻窟

暮 歸

倒載の山はいつま郭公
 可隙
 昏れを廻つて鬼百谷
 露淺
 釜はくはの万子ゆは北居
 毛實
 砂地より琴柱ぬる草外
 且陽
 誰かある土圭を灰せ月の昼
 湖舟
 常り 常り 勝れしる肱を起る鳥
 士林

筆の香を服するに梅嫌
 花知角
 如神無地く伊達を董り
 花吟
 心以日え何るる怪氣帆を上
 林
 云もも下りて竹の席同ん
 陽
 壁持の欠を白眼む石露の屯
 實
 利根下やまのいあるれし
 浅
 足代の上より雷の落所
 湖
 哀んく傷ら寸瘡をり
 以
 塵をよるゆり治の摺女郎
 角
 勝士の焼火を昼笑ふ胸

及柳の臨み泥も月や也
 実
 ありとハ降る若州のす勝
 陽
 ナ
 字も本の跡追もせす凡中
 隙
 亀を攪くくもくもをむ
 吟
 腕疥の多木を兄と義を浩
 雀
 唐女も宿ぬを和語は物ぬ
 林
 之去帳よりみりへる陽美の
 湖
 太鼓うおへり向ふ組板
 江
 白雨の一刻上る掛海を
 塵
 帝帳を先て流るる間
 夫
 草

捨心女の御守もろふも
陰いさ日の川尻素も河原
琴彦 文里

雨 中五

や身不や擡え抱女のしるき
ふ節ある樹木夏に掛りへ
ひきよしの海を物とを捨たん
下流くむす不用の涙
藍梅の峰より月のさそひて
魂 有隣
酒水 宿後 朴志 詩栗 好困

放されはを泣き喚うつ
夜とされしるいさ子の衣
鼻の香枕おぼや子這あけ
赤い仕るる位はを泣
古つらあるま楊梅と捨たり
新あいらひと捨る見せる
山の端子麻といひ此酢着板
百中黄をりの魚の眉
朽木盆月 勤の心元る
るる照らされしる産於
北湖 一河 夫草 鼻落 非琴 志 湖

嚏く三子世外也の蓋
熱懃七るサバ下講中
ハヤしの夏を隣の下訪階子
いまりの食のゆきも宛瘵
露宿のぬと金具をたる老の袖
た者のい柄やといはせ
咳ひをの換身もとも振むる也
必荒出他の師普後
詩州のけを寝ぬをむつる也
人於店を隣階こまぬく

河志水也水信水

有しとい自力の病いさて山
良菜を流る入札の岳
旅陰の又を松栢(りり)と
出らあいて聾あ子や、
祓んとて登れを野河の波あ
のすをその洞へ町馬
押ふふをさく割毛夏代
上りて居居へち河馬
如き輪ハぬこす以也の夏
雉子啼ひを杖太清

圃平也水泉草水泉

山 庄

薄やの茂くつじりふ太
下極ひじり又立の矮鶴
とひつ持巻を陸のいさく
思や葉まじりる。瓢たけり
後よのりら跡こむ巻、松の海
岸多搔くとも、以海とあり

玉泉 崔錢 彈多 紫陌 東公 西仙

廿九

うらやま 好まほより恨ん
うらやまとあくが入る毒
うらやまの袖にうらやまの吉原議
石碑をうらやまのうらやま
寺をうらやまのうらやまの基
寺の眠りき世のうらやま
岸はうらやまのうらやまの
いのり裸ふせく神の足さ
はまをうらやまのうらやまの
月をうらやまのうらやまの

千卷 泉 水 東 仙 茶 泉 水 陌

よる所の端を越ゆるつゝの
通り矢はくくすの草を鞭
らるゝのさき北の隊の結
婦をゆるす他の中者
百をせぬ下戸を脚元の記を
蕭ハれ片片をゆり陸奥
族扱ハれを証しけしのは
妙葉あまの耽る行奠
以て女を算り入一約のい
あまは下地う下管の昏

百あり東蒼泉仙あり陌蒼泉

月の宴あまをく冬はん
世畏ハれたる雪の細を
らるゝの尾とふまの忘れあ
あまをゆるす走る毎舟
我ら船を二つあたる初秩原
つまなく秘する志子の又綱
あまをゆるす他領を歩む官者
竹の葉並下り盈る牛の山
連城の襲うゆくむしり
流の端乃のゆくあま

毫あり水蒼泉陌蒼東あり泉

大筒を三放ましくおれり
 中下
 名の長尺鯨の床つり
 けり弄
 岸の如きしり鯨をゆめ
 じり
 所端の箴の乱れおのせの
 一亨
 ちりこいへい負おあり
 好府のけい言居り
 千金をぬと掃りけり
 おる所
 自一合落ちおる包もほり
 夫昔
 取上ぐへる癖おれ味の
 暫実
 すじりおはは遠路を画るは
 蛟雲

四十一

川舟こ踵もをてさくみか
 紫川
 筏止り流の屋を掃りけり
 丸こ
 おちのりる目を持すみか
 松伴
 すじり川中流の洗ひる
 風尾
 ちり帆も為も居るあや
 酉仙
 鯨の口まつりあつり
 一契
 研切つて空におちるあや
 海窟
 飲く不食上戸のあや
 巢居やさるる上古の良も
 おりつりつり陸やしろ白

蟬
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴
蟬の暮 大薩の自余は節也 せこの屯 喬伴

夕べのやまを待て又日の照る 梅坡
夕べのやまを待て又日の照る 梅坡
夕べのやまを待て又日の照る 梅坡
夕べのやまを待て又日の照る 梅坡
夕べのやまを待て又日の照る 梅坡
夕べのやまを待て又日の照る 梅坡
夕べのやまを待て又日の照る 梅坡
夕べのやまを待て又日の照る 梅坡
夕べのやまを待て又日の照る 梅坡
夕べのやまを待て又日の照る 梅坡

江都
季の前指をまつく
前を推す

連心は軒梁より
又昔非琴へ又通の

耳のあはれといふ
裁く集中の
とに

く歌を子に起ししと
下戸なりぬを
茂雀のほよむす
周と知れぬ
二声を
卯のむす
半溪
菟朝
沾洲
乾什
為邦
百例
芙水
沾洲
沾山

うのをぬきし
山河漕
小統より
々のも
むのの
後
泉の
うつ
かつ
半溪
菟朝
沾洲
乾什
為邦
百例
芙水
沾洲
沾山

新あまのむす後のほこり
 川音中あつたわくむす
 さりたは巢屋の巣蝶壳
 追ふ人また追ふは蟹た
 ましつれをこまくまの玉
 層のむねかたむす
 赤州下地紅るる言合船
 小巻の健より下馬
 志るはの奢の出る星ら
 宗瑞
 真貫
 市井
 仙真
 占川
 倚石
 咫尺
 湖十
 青峩

主膝たつこまの
 上下と裸のふるさ
 借涼しやまの岸の灯の光
 火を涼し川流すも
 吹切るわらわをまの色
 先か州の沈むは
 長芦
 常仙
 蓮見舞の
 其角
 沾山
 敬雨
 魚子
 沾禱
 夏月

如龍やまのの力を推おのりの力ちから 中な子こ

東の海と上 畢

